

明治新撰
俳諧七百題

附
かき
た
り
し
り

下

5
697
2



利門
 號 697
 卷 2

明治廿六年十一月五日
 坪内祝藏氏寄贈

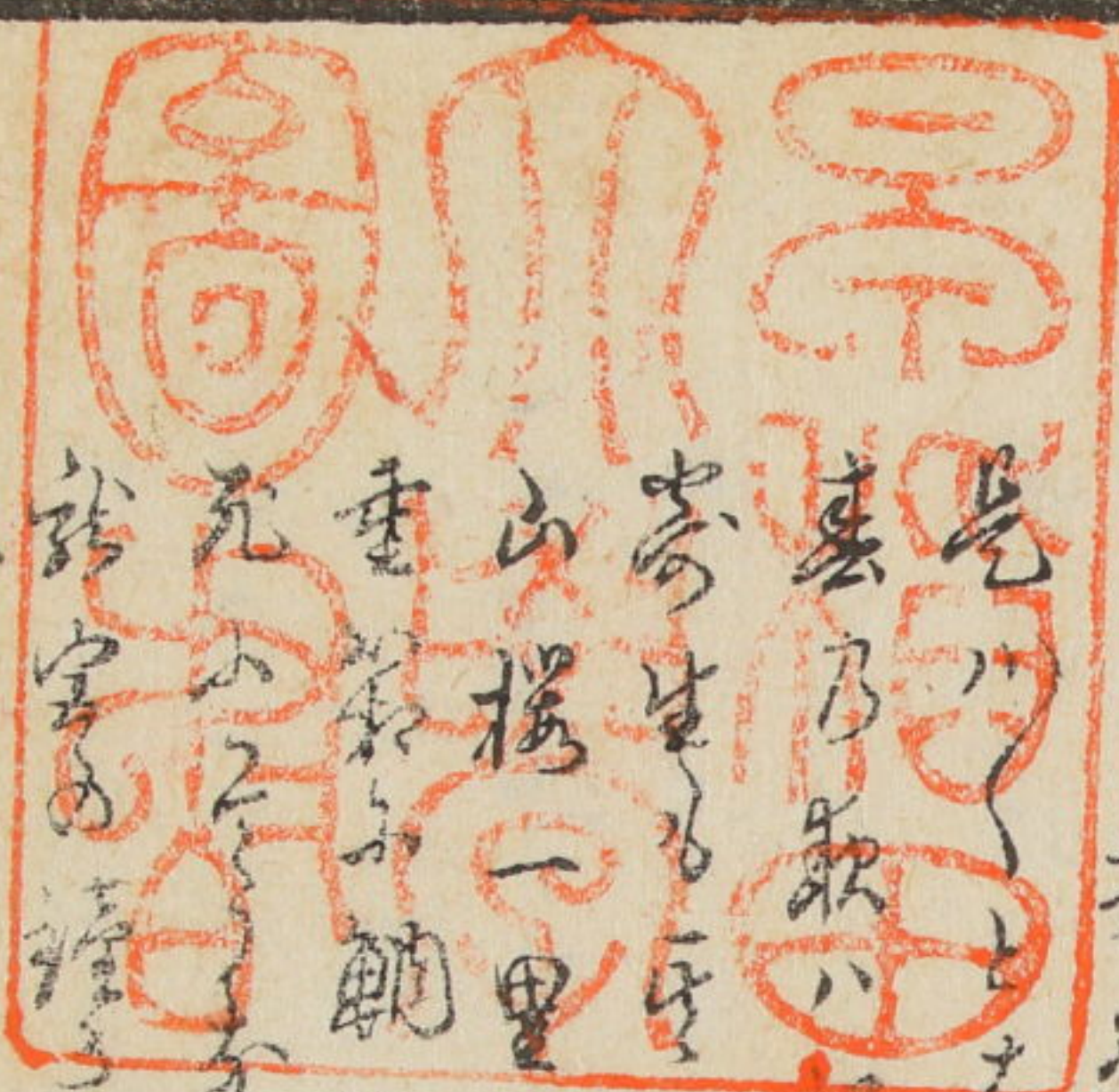
新撰俳諧

諧七百題卷下

俳諧本因先生補完 章整居竹史 孫

紀行附名所春之部

芳野山



是川... 春之部... 貞徳... 翁... 山... 原... 去... 紙... 許... 其角

空下

紀行附名所春之部

〇一

星お〜そ思ふは〜赤つし
風あ〜と静にたり夜乃星
何の雲ハ何れ見ん星より〜山

嵐山

山君也 雲ふき〜ぬ次お縁〜
星ふ嘆中〜星さ〜心片〜
暁春

京師

星ふ来々都ハ幕の〜
清乃

星ふ花小余ハあき〜
心と白燈縁ふ拵ひ〜

星転也 清き果々〜
星転を汲〜
候主

多羽

星〜引出共牛也多羽強手
暮巴

西珠

星乃〜也 葉小牡丹も楳の縁
暁皇

花雪山

帆かけ松も〜
上慈も古家也 珠生の花雪山
如美

上野

星〜
社影も雲井楳と名も月〜
門

道〜
道〜
空

人去了櫻餅集の月夜也 全

日吉里

法之軒や字結きく法くし 溪遊

志村

✕ 史多筆の風名も是也 櫻餅 祇南

佃島

東方まきや佃の柳根子料理人 語長

風吹くふ後中も浪の集り可也 風年

箕輪

物うきや空のまのま女 名 様夕

道の渡り

舞の梅や程々 渡り 古 一 溪

東殿山

むし流霞上も道つり山 櫻 風高

六心川

浪転や水もさひり常き 築 万川

六心湖中

草翁も何れねさす如く紅烟り 為山

七里溪

牛の脊も酒つりか法是也ハ 梳 亦 権

横川

法もや空の珠生の法も 川 秀宮

言田

糸初や鞭も手隠りまは色 有 雀

深井

危傍深井も空も雲 迂き 子 架

袖ヶ浦

浦の名の袖縫出の沼干立 波上

岩根山

岩を於るか幸たり 踏々 嶽 墓太

岩を於るか幸たり 踏々

以ふ末の墓を足知ぬ木の幸立 味帝

羅乃林

敷別々林や柳乃大目々ハ 空

伴吹山

二月乃二つも 伴吹山 空

二見浦

魚の尾やふり分て 二見 深 柳居

茶名をわきし時

桑名渡江

賦了習と志帆は揚羽の心蝶々の 水夕

控ふゆのふふうたぐの沙干 浮 子代

四の市登橋を足々

陽空や桑飯かく波のよ 水夕

鳥帽子山

雲鳥やふふふふふふふふふ 暮方

矢別橋

矢別川霞の中を流さるる 李喬

本野原

若柳や桑大畠の村々木々 暮村

溪名

注山や橋ハ散きと香ハ弥里 蝶夢

吉田巻川

冬枯也 樹木疎少 雪の少 木葉

駿河路

履の雪立一 方一 山は久ら 凍結

宇津山

山吹せ 杉十 葉子 樹隣

鞠子山

夕雲雀 葉の如也 鞠子山 五菱

梅葉 葉鞠子の有 此と 汁 翁

須戸

荒沃 戸も 様一木ハ 岩 丹沙

加田

去亦 多 崎ハ 好 多 沙干 一 漢

多武峯

鶴寺ハ 地子 是 此ハ 多武の 峯 野左

月ノ際

より 上 白一 此 岩 此 梅乃 翁 貞三

石切崎

付け 加ハ 葉 火 消 之 難 子 の 聲 全

吉水院 子 南 奉 皇 居 之 跡 を 好 す

古 竿 小 堂 乃 雪 積 出 力 臨 分 松 隣

院

泉 水 也 院 乃 車 乃 仍 在 一 女 泉 龍

くは

山 迄 来 下 所 也 乃 亦 一 臺 軒 翁

雪 乃 今 霜 乃 亦 此 也 炭 乃 雪 全

雲崖よりよみ休らぬ跡の春
行首下矢立し一糸の極る時
○紀行附名所夏之部
凡山

須磨

樽壺ふりあき夏や及於月
翁

波身ふり

樽詠や古井の清水先六
全

最上川

五月雨を待つめく深し最上川
全

高野山

桑目ふり柳と兄と遠くさよ
麦林

世宗

舟の窓より見ゆる木の高居し
全

舟月夜初あき水

木骨のまじりて香も遠く夏大根
支考

木骨詠

棧道や人の林をぬ木下
深文

箱根橋

湖の下の水や夏木ぬ
不夕

又條ふり

扇屋の紐かけて羽の星の分
漢達

院流を經て

夏竹ふり牛ハをあき水車
茶室

舟月夜初あき水

滝佛や湖を望み浮舟堂
波上

冥清水

湖の目を細めたる 清水のうら 多疎

大井川

是々大井川をせきす月日 一嵐

穀生石

雲をよみ石を産たす 杜宇 全

子賀浦

帆も浅きや船へらのせ夕涼の 全

宇津山

鳥の中何れもぬ山海や水んや 七夜

左東寺をよむ

古井戸を覗きよも 是のうら 檜樹

不破関

蜀も中より見えし 不破の関 菟調

亦生島

上々さや海も生る 竹生 菟 東橋

醒井

一口小春中のかく 清 水 美 全

西形

兼子 清の甲斐さへ 向ふて清 水 深 全

舟月 振の山

日 照あり 八反州 向ふ 初 橋 全

姨 姥 山

社父 祖母も 法時 持て 田 唄 全 深 全

川中 留古 戰場

多々 一 世 不入 社 堂 下 田 植 全 全

溪 娥 山

押せしむ枝折る新巻と書 全

客中

かえりて系舟才一啼り川を 曉登

静見橋

五月雨也鶯籠ひてす橋をら 暮去

水室の日留峰也

三寸の舌も折るあり富士の雪 全

江右島

鳴きし波引かき歩後り 吐月

山中海

故のわらぬおきりふらるる志是れか 一巻

○紀行附名所秋之部

程のうらふお打出を足巻ハ

ゆる海也佳波も横たふ天の川 翁

鶴鶴石

此石の舟を四かき程のふき 麦林

三井寺普覚院ふて湖上

乃月夜

おせつる月の系色も秋の波 季吟

更科

懐松や州の強ハ恙せふの言 素界

清海宮

晴下り雲の漏り澄 落島 陰六

大磯ふり

雪のさの狭らうらや後の月 素藍

和舟も

恙るをいふ交てもくせぬ柳中 涼風

一糸の腫中あまの山を

空清うあまの情や女即ち 枕を

志波浦

雲人の乳もかくはるまの月 涼帝

羅澤寺

紅い雪の羅澤もつらふと朝の粒 左

旅中

鶴の指や侍豆多落 塩山 暮志

○紀行附名所冬之部

竹生島

水多の浦ふるあや弁生等 皮林

淵田川

船形の足少き雪の 柳 乙流

妹控山

持る雪を映るふ髪や 枯尾等 琴待

文字の雲

雲の尻小文字のあまのすき多分 卯七

お宿の山城

月より水りやあまの情の如家 冠子

熱田の海を日たり

星塔の雲を居るあまの啼く多分 翁

籠月台の山城

籠の山城吹く丸多分 源帝

城の懐情ひし

うき雪やあまの 後ハ親あま 改之

途中

陣の形もまゝ足し初る空の人 曉春

空乃との山も空りて

人より空も果作る数 空

とけ

旅人と森名作まむ 初時 翁

枯々空より聖書の宿も禁火さる 程然

○送別春之部

初春を道にゆくと柳も女事家 翁

雲霧の空も春も初る同く 聖世

梅さくら二月斗り日さる 利牛

先生より世も結るあふ

とまゝ下

杉松子袖もあつた山はさる 如梁

空の傳もあつたと

壁の睦もあつたと 素院

送別

兄の送る空も霧もは 尼 坂 空 友

全

空の空もあつたと別る空 琳人

一者注所甲斐の玉垣の山

兄もあつたと

旅もあつたと踏もあつたと山はさる 源盛

浪もあつたと借もあつたと

春海苔の竿も先もあつたと 聖世

一葉防風仙窟もあつたと

梅もつる玉月日清送き寤る 全

半指亭送別

鏡持子風ささるぬ首達 彦右

吉野京沙の風信ハワの魚も

何れぬ統家の若達を送りて

夜寝ハ涙無れ吃よ 志西 旅 吐血

志川の笑も名のこふ海客も

代の旅ハ野風難の一助ある

き一能ふ写の儘一と

姫舟と旅らん世の茶 手取 空

冷管送別

宵ふア那の心をおしき 家 小 石 山

よ一野嵐山の心をおしき 家 小 石 山

ハわのこやわれ子まあり 草子 深

高ら首達を送りて

蝶多や都の空の雁ふらむ 全

碓山を送る

杖返すを此近に旅や担り 爲山

○送別夏之部

送別

鸞籠かき子宿の方之わさき 彦 六

翁の旅行せ川崎と送りて

前志し妻の白ひや 宿の 目 刺牛

四睡々武府小形等

牡丹ちりて心も重く 生 枝

行旅の首達ふ

以今や官弁の程は曇るも 後通

乙妙の御所

吾妻や秋ハ近江とおもひとも 山居

祖嘉ら一統ニ新時傳りを

契望也

死より生くと待りや 郭公 治徳

信子日不事時

散る村のそ後安きよ 芥子乃世 戒人

変の穂や出抜る程麦の中 聖故

浦風やむかす 暖めはる世 啓水

柳居京小新時秋と契りて

散とも又吹夢らむ 反屋なき 麦浪

澄桑ハ戒り人小

送々中州の穂も重非 是 暮左

吾も世世送る

嘉祥幾十六又世首逢り 如 空

海り航く二人子中世居

首逢り加茂こそ思へ 今 吐身

海の結丸尾陸桑ハ新く世送る

和葛也 和と志とくハ散ら如 向 空

老沙の縁何子航り世送る

関も七尾さきと縁ハ 徳兄 戒 空

世 空

故の比すも身ふまは 寺よ 村 穂 八 葉

能翁の杖のあしと 是乃 母 桑 烟 世 巡

り 江戸ふと ありと 志とく 空 星 世

渡き程巻海を慕ひ東海邊
せむらふ大夏史を送りて言
福の榮ふ店も袂せあつ

信寄ふも一めを疎し葉の影 為山

京の来ぬふたひ杖を道守を
の送の程寄ふゑに古く部公
ハ夢阿らんお物たね離空手

たそと智し袂せ別とあや 左

庭下乃実りゆゆらん 初松魚 左

撲り別

蝉の寄ふ耳ふとさきとあ 一り車 為山

○送別秋之部

秋風の舞ふ白旅多川 くら 豊林

又綴へ形ふとふ向ひ

きく一の月ハ二人を忘れけ 骨竹

和ふて送るとさ

秋の寄りあつハ管原の 木園

侍寄の人を清夏の海ふりて

葉吹ふ秋をたむむ 藤あふり 藤栄

ささくささ枯れし物と送る

江を隔つあや 藤ふ秋の 軍史

中元のり周并る物送と送る

寄り売つ中ふゆて 程の杖 吐丹

○送別冬之部

萱蕪菊を送りて物付村

らの路ゆ水あふ美 弓名 跡 くら 杜玉

其角ふわのり村

河た川のせせりまのたりるの常

考字

該通ふ別り村

足巻るまの村人室一と名部山

智月

ふよふ一人の海やまのり村

桑人

冠子ぬわのり村

ふら屋備一併智也尾端のふり村

法端

妙別

法分せぬも桑屋を村七し

院屋

○留別春之部

乃基やま峰奥の月ハあふり

菊

友ハあふり我ハあふり

安坐や程くとあふりとのり村

安林

字の鑑一のり村

あふりまやあふり村

安考一

安桑山ハあふり村

屋基や木奥ふりのり村

西岸

鏡城留別

松一本ふりもあふり村

乙見

果州のり

安考ふり村

吐村

安考ふり村

安考ふり村

安林

○留別夏之部

安考ふり村

安考ふり村

あかへき情性の道も能近し 藤原

善柳屋と出た時

きしきと出た行くあや柳子 全

留別

風意を愛しくも藤下は 軍吏

州のちも経つる世と取り

一等のあをたしう又母も驚

序とあはれ申族と習ふを

葉と雲ふりしあきさや 部公 吐序

○留別秋之部

世枝送るるあふ

物書下病むさしき 前さし 菟

送る書の送り果は木骨の村 全

石の聲おありし何百 支考

骨直ハ破つる冬旅末後も 柳居

舟の船凍るる浪一前さし 凍鬼

社中の今へ

い病くふそたを退くや 種甄 凍帝

○留別冬之部

い化さるる雪ふところの 委中令 翁

涼川の雪屋と出るとを

こからし申旅不病り雪富士の山 伴六

風り雪とていふてあふ 照 岩虎

尾注依ハ後不病り雪 葉花子 麦林

○贈 荅春之部

い〜〜 瘦たる人のあふ文法ふすとを

とき候しそわんも程と世評の
 宗徳
 故に湯島を越せし海子
 香小逢ふとよし世評はぬそ世評
 文富
 志はしき友小
 未あしそ女房も程せん水程し
 其角
 髪をわぬ人へ
 松も急を居仕高の友や藤 露
 冠子
 兄風亭
 水も又程下も下那す 梅うそ
 曲江
 重中道士と訪ふ小逢は
 湯乃と足はり此へそあつても
 練聲
 海の梅若小梅か今より等
 初茶やまわおもえりし 知恩院
 巻左

公麻の羅發

今
 今もと被居らんあめり魚 今
 益強の人の物本石と心も数
 在哉しそ
 石もと楠ふかつらん木の骨計 此身

○贈 答夏之部

果居を思ひ立ける人の許も然
 海しきハ差圖ふも程程居り翁
 今月西や海の浮葉せそも然ん
 今
 本言式言言る言小招る言
 不古交る家名を騎しそ
 成りくといはる角也 書い 海 今

余居送り高きと云ふ屋をりて
 経糸の名跡や新十ウ 斗 支考
 折居の事や物り成り世ふか
 又云ふ也堂のくしの跡 雲雀 辛因
 居やとて堂水も別
 行遠ふ堂やとあつたのちとま居 全
 人の訪ひ事と云ふ
 決意 云ふと云ふはあちやと云ふ
 杜堂と云ふと云ふ
 省の世よ人の家名も息もあつ
 吸家屋の白と云ふと云ふ
 松のあつた高の屋と云ふ 東墨
 妻浪音

今宵の梅の枝屋を料 松 漆埴
 閑地なりらお終り及も村
 素陽 堂や先刺を云ふ終り也 全
 書と云ふと云ふはあつた人の
 二の居ぬ宮守のり 料の屋 全
 侍書保ふと云ふと云ふと云ふ
 きたる堂と云ふと云ふ
 まわらぬ堂作りと云ふと云ふし 全
 空嬰女ふと云ふと云ふ
 附くハ君と云ふ月の競うと云ふ 墓方
 雅きりのふと云ふと云ふ
 侍書 の 徳員兵と云ふと云ふ 物 全
 名利と云ふと云ふと云ふと云ふ

憐らしき増雲ふ似たり 吐 螺 吐 月
或人の羅縵也

○贈 答秋之部

出山の結せありふ 福 一 亦 全
九月九日乙酉の二指せたる是も喜ぶ
峯の石や日曇てる雲と葉の海 霜
初年ふと秋をく 属也 料の中 支考
やまゝあき古の月も海ひき
武士の江島ふふかす女とま 秋光女
昔接ある極仙窟を今
物ほか女ものかてもまあふ友 涼解
昔遊ば座の物ふはれけ
今とあまハ

蕭蕭も乳唐家きく月の月 全

涼解の旅志うへまあ海り
ゆゑあといひやるを今
こち向けと雲と動くす秋のあ 秋因
波光輝脚の毒りあふふ
涼光すむるも何れは葉も 霜
涼解
涼解ととひく

秋光や二夜ふ明りぬの 属 秋光
旅より不涼解何れは
夏士も是ぬ先何れそ寄の 海 青藍
日光清造雪のり影中も
そと来す也月宮殿り月の山も 吐月

○贈 答冬之部

越人の方へてきすこと

二人見し雲はと来り降けり 五 翁

井河のき人の事と云はれりゆ

雲と空は青柳花の如く見ゆ 全

尾ふふりし人

推さく浮世せしむる路ゆく 西 年

一其家の人へ

冬知るぬ者や牡丹小舞 春 幸 園

何れし人

菜の花は波にまよひて火はなす 全

阿の傍に路をとりぬ

菜の目もぬ匠留や雲の細代也 全

為之得沙の空も

成る屋の佛もあゝ冬木 立 孫 齋

十年と経て来りて訪ふ

志き家あゝ世ぬ者め聚る家 院 齋

○ 題 詠 春 之 部

女子たの七種離れどつと

とけりも能くもつと 蘇 一 の 形 其 角

性善の心也

杉々後葉の夢取り 垣 の 梅 占 佳

外 院 梅

は梅の尾さきもや 雲小こ方の 月 孫 齋

おとりの下で雲もや 六女内 柳 尾

有公堂公

さきり結入も 阿達と水 車 孫 齋

○題

五峰の松の波を傳うた
 香合の銘
 喜風やひまの松の子とせ家陽
 巖方
 龍色蕉翁水満
 湯也世不かまぬ 祝 水 空
 龍の孫の孫を造らたるを屋小
 雲不入るはおや多の位 山 空
 龍の孫を屋小
 運の古の三井古の賢
 龍宮小宮の松をあるは龍の宮
 名位

十六橋記畧

此何より 龍不入るはおや多の位 龍
 龍宮小宮の松をあるは龍の宮 龍
 運の古の三井古の賢 龍
 龍の孫を屋小 龍
 雲不入るはおや多の位 山 空
 湯也世不かまぬ 祝 水 空
 龍の孫の孫を造らたるを屋小
 一人松の松 喜風やひまの松の子とせ家陽
 巖方
 龍色蕉翁水満
 湯也世不かまぬ 祝 水 空
 龍の孫の孫を造らたるを屋小
 運の古の三井古の賢
 龍宮小宮の松をあるは龍の宮
 名位

左下 全長

○廿

青磁左衛門滑川の景

管火のふりもの形 滑川 宋園

高戒の景

改め家正足世と也 玉名のみ 西岸

榎木を修りたる花生の髪

きりきりやゆき生も箱 州 暮方

新紀玉川

玉川や景ありりハ志生 水 比月

○題詠秋之部

女井の葺地せアア

葺り物中鼻の先あり秋あり 其角

三男唯一公

扇巻や蔓一走りれと後より 末墨

三笠山石墨二句

麻の糸うらり〜と石乃以後 涼亭

墨の糸の石もあ〜と麻の色 末園

憐愛人

羨の糸い人子仕きり〜と形 栄花

如是我少

福安中二度目〜後丸木橋 白結

三足様

衣の袖の糸ふ世活やく中の中の様 味帝

葉砂世福りゆふ

葉さく巾袋の尻ハ袋む〜 暮方

○題詠冬之部

鐘四鐘送

○題西春之部

枯竹中花をさくらく一埒田
 水仙も芳引葉いあかりきりり
 玄魄のたそけ村金とあま
 物ゆきよりあの人を在 辨 ひ
 白き
 そのさかかゝると墨乃花をぬくも
 子承

画賛

山吹や字流の嬉野の白あ時 翁
 江のそ居る人の路ふ
 月影もあくと江のむ精うを 令
 形神の笑
 吾柳の歎の掛や云。の 樓角

石菖

迎きかや子ふ口石あて々 馬 道春
 西施の糸
 海棠の枝せとらす花あ 那 猿左
 和由海堂
 字の陰力の路くあまゝ知寺は 鬼士
 筆意の蟹
 枝たそ蟹み款をほほら 春 孫伴
 春西堂別
 醉きさく人乃歌ある小はくく 令
 角成りたる裏の麻ふ
 船やを角解したるまらの麻 春
 岩の煙

月とてなる事ハあるから 陸ノ水 みにむ女

席上画燕

そのうち不意ハ鶴もや群 燕 水

老人と鶴ノ合書ハ老翁と

信筆 海ノ鶴ノ系 碗 二指

簾華ノ画

吾柳也 然らぬともろの美 翁公 暮夜

柳小舟の画

呼止ハ舟の森ある故 柳 空

紫平の賢

秋歩 行のむろハ小舟ノ月 空

程ノの画

法系 也 汲ぬとも 船カ夕 空

賊市袋

此成りともす人 去ハ 吾乃ハ 空

三富史

短ハ 左子 明形 空

道の途乃柳の画

清水 也 糸口 空

左子賢

ふき 左子 賢 空

山吹子性

空 小 性 水 空

性子の賢

老 空 也 五 方 空

○題画夏之部

菊の息女の清くぬ 杜 鶴 守武

紫扇のていへんかんの後 翁

糸子画

かきこ子小 和や 夜せを夕 鐘 妻林

月世をねあ菊子とあきる 杉の畑 惟然

顔又く涼く 唐糸 止る 嵐中

藤の茶や 西子 書分てさ持う 三山 其角

道成寺

仕人衣なり 種の中 有る星 小 徳貞

大黒

握あきく 提く 出たり 節公 暮方

布衣

天地の袋をとり 月源 一 左

横通

は道へ 池も 塔さ 左 月 答 左

正行 教訓の画子

挿の 色ハ 石小 紅雲 一 左

其角 雨乞の歌

夕立や 以て 了る 小 筑 波より 左

蓮小 塔の 画を

涼く さま 隔り 小 志事 ぬ 若小 月

拵子画賛

骨とどく有と善く良の雲 全

立像達磨

きくくや九年とらへし立像 全

松舟梅の賛

鳥居不為しと梅舟の賛 北正

抱女の画子

屋石守の夢の鳥りおき雲 東家

○題画秋之部

雲舟白画縁

おちらむけ糸も沸き終の書 翁

骸骨

果ハミ家扇の骨や終の風 麦林

兔

舟とく海もか田き終雲 一 兔士

西行の画子

晴立と善形墨の袂 一 原文

布袋月小持さたる画子

指させをひきき月鏡 一 以月

白鹿画賛

跨の角ハ白きと月の嵐 一 全

○題画冬之部

舟の賛

多望と天宮舟の善き舟 翁

東坡

我々の思ひいかり雲の雪 其角

出山像

埋火中曉見きふ星をとり 川 雲林

達磨

枯草不履や跡しそ池の免 空

青蛇を之取急切徳の枯壁也 一音

六高仙

巨隼より二人何男や 秋 合 深傭

菴子

蝶と此身爰ハ道理そ何極計 空

小所縁

木も竹も皆と成りり小世の冬 無文

獅子舞の發

面白き木の葉の若や秋未月 夢吾

○悼附 追善春之部

翁の百ヶり同子

空跡 未款きの敷や梅の 空 世技

西上人の五不集忌子

左のきりと右の跡る様 一の 空 為字

花不集てそ衣更着の 空の 空 支考

咽々うんげを哀ありの 空 空 冠子

子智の脚の身まうたふ

飛ひ交差くそ怒し梅の 空 空 足風

母刀自の才まありぬら子

忙然と只ある跡海雲の 山 空 山

宰多一周忌

老鳥の竹もあき只巡るう 那 空 曉産

古父三十三曲

廻り来々髪膏ふかす妻の水 全

一年の憂目のまじき女 策文
伴月集

人若く世ハ心の春の晴れ 全
花雪忌原辨

孫生も雪のまじ 塚崎 全
子姦村と伴

力なき山の端見たり 櫛 全
六也々妻と伴

とくまらぬ水ハ冬ハ雪 解子 此月
孫うせし村

手搦の涅槃ふれたり 枕 全

ゆき 曲川伴
ゆき 枕 全

追善
細水の三千 禮や様 全
鬼何辨ゆき 身まらぬ 全

去由子の消えよ 全
あきまらぬ 全

流雪やそれと雪さへぬき 袖 全
孫生十六の三田 全

去来大伴 全
まき法蓮ふり 全

春のめしき 全
おのり 全

新雲の祥世と碑面すあけ
下亡父の之回忌のときむ万里
より中を

○悼 附 追善復之部 全

新雲の何と本末の家かむ
手のうら子息く清く曇くあ 去来
或人子と失ひきけの時 前年
何く雲の山底と名を繋ぐ 此
吾の雲ふかむむき雲くる舎の雲 去来
春と早く雲の才まうる雲ふ 此水
水雲月の相の一葉とおのりあ 此水
面影の故地ある雲の源と 去来

思ふ人の分まうるると嘆く

才ハ世あて移し施さむ床 柱 久来
哀度と人ふらしたる涙の 子 悲れり
己を御車のかげ尾ふをく
故のふ父と失ひ人せしむ
照ふいと軽舟も吹ん故きり 叶 曉光
晴海ある蝶羅せしとあて
清く友跡きる友の 雲く 如 此
悼 夢 虫 器
舟の雲や散る影さう 雲 此
美侍寺跡父の影ハ芭蕉花
をせ残 徳をて七とせの雲あ雲
と送迎石碑中うやう雲生あう

色ととも形うけの引き書何し 嵐雪

翁の涙子結て

ね之伏し紅あわの汗拭き 菅良

是子と出ひし村

蓮ちり如坊の嘆しとおもひし子 翠岳

○悼附追善秋之部

悼翁景

秋風ふれ書を然しき葉の枝 翁

母の喪ふおもひたる人の

涙ふ散る木の葉あきとも秋の香 麦林

石無才かまじし後

吾人の解はくあし秋の香 至角

雪下り葉をかまじしと書て

森らき夜やとへ冷ゆ世 嵐 去来

悼少年二句

吾親を知らぬ吾子ハ秋の風 至秀

然しきや麻木の葉も秋をあきて 懐雅

曰

才時を言さあくと秋 時 季吟

目業のこえの音も涙の形 秋 秋風

麦林所といふむ

登蓮り落しきふあき 小 希因

草園分海りしと書て

坊師も空より何けて空の上 凍城

九月ハ白芝山の書分まうりる不

雪台踏らぬ吾子秋らきて秋葉の香 全

同十三日双飛也と先記あり
 人の親姑栗子むせふや十三日 左
 甚修書方よりける
 とき跡中針もさむり能の面 軍更
 孝固せしむ
 淡菴の友々わきり 便の明 夢方
 倅
 寄をりし 乾魚不堅口の便割 曉菴
 風子一周忌
 去年よみはきく 海邊墓系り 吐月
 暮月吾亦山の分まつりる
 せむたそと
 おもひやう一物くも秋の月 若山

健々危嶽の登りし 松重翁

共三四日よ

獲遺書 咄もあめり茶の雲 空

いまはくハ運心な青み月の若と
 一舟せ跡くく泉下の雲とあり
 ぬふと泉地居士の百々日管とらる
 流雲波おやおんる

おもひやう一々曉の舟 水 空

○悼 附 追善冬之部

少集と集つる人のむせむひなり
 埋火も清や涙のよる 春 翁
 悼翁一と二とあり
 赤きわくとまは隠きや枯尾 春 其角

十月と最を并り折尾 毛 嵐雲
 麻も高と入る淋しき 陸山 小 支考
 力も中録と成つて冬 籠 陸坡
 年の終世経の思ふじ
 人の元へ市米は
 清雪ふくむも思ふ 梅の香 寺武
 其家の内人乃方まうりたるは
 半も中をそ見ふたる友を多 妻の
 綾巻の端は方まうりたる子
 象師の白の好田と位衣の香 養右
 少年十八男とてむ 吐青
 うのあつも道さぬる子於冬乃月
 賦家とてむ

氷あつるの聲もるおもひ 分 全

流芳子と俤

降消の程は雪も 葉の香 春山

○懐舊春之部

碑の目もあつてと 梅の香 春園

父の涙

涙の香も花も香 梅の香 深奥

芭蕉庵の跡と坊主

萱料の錦はつひと 流やたれ 曲翠

露葉の一句を跡せしむと

塵ふおもひ 埃も思ふ 梅の香 麦林

双岡懐旧

花と家と月と雪と梅の影も 人 曉堂

翠空の墓所

形もかり油をきく袖をきくゆのり 全

数重の淵

縷もよる夜を八橋む 董うか 源燈

芭蕉翁の遺所

梅の香もゆく翁の跡中 了 軍更

おあ

雪霜ふ鷹の祖師あし梅の香 暮方

ハナハ終る老祖父の子孫の途

ゆくもはけり多し詠ふたをきり

影いさきや

一竿ハ死後未也 玉身干 件六

言 皴

あけ軒や兵ゆのとゆる墓の跡 翁

旧庵と暮て

一梅ハ何変へ跡くふ 五木 立 柳居

空路ふて

道高写ゆふもく合籍の香 長虹

去るゆのへう路 七由も 友木 立 妻林

昔我兄弟の縁

暇時の道も忘るは其枯 柳 源燈

懐け旧跡

名はゆりむきと今の涼を 少 夕可

芭蕉翁縁ゆか

静夕の懐けゆのうき 翁 少 暮方

暮 懐

○懐舊秋之部
おめらきと菊ふは生河津あり 左

一 笑う縁を訪ふ
湯も動け菊は泣きハ秋の風 菊

実盛の宵
おきんや船甲の下のきりく 是 左

或秋翁の多き思ひを
稲妻方物ふとせぬ 海ありや 是 左

父のぬせりと秋夜をたのむ
路ひききふ

兼由よ交ハ秋津よ 只意—— 妻 左

佐方の古蹟
今足其惟幕のぬそ萩 是 左
速城

梅若の古蹟

兼由とらうりありれ 後菊 横 曉 左

半盛の懐きを
おのきや若人の泪きりたり 左

○懐舊冬之部

人の居やありて

されハと持 月夜なき 燈の光の夜 菊

田里の人よ云々 是 左

木枯の落葉ふやあり 小橋 是 左

おあ——

きりぬの道——と思ふ年の 著 除 左

芭蕉塚

葉を破る 玉指やとふ冬木 左 角 上

友人のあきしめを

うけへては是れおとせしめやむを

麦林

或人の時を思ふに

ぬるまを思ふに

軍吏

世に思ふ

子とて思ふに

曉曇

雲ハ時を思ふに

全

雲ハ時を思ふに

全

○戀 春之部

紅梅のあきしめ

翁

石女のあきしめ

翁

陸舟のあきしめ

今よ思ふに

はたと思ふに

全

おと

世のあきしめ

全

男のあきしめ

全

おと

振袖のあきしめ

全

藤入のあきしめ

全

七種のあきしめ

全

おと

あきしめ

全

おと

浮舟のあきしめ

全

春に思ふに

春の夜に女とては娘の形に
全

出にそ

娘の形に女とては娘の形に
全

女のとより女とては娘の形に

出にそ

女のとより女とては娘の形に
全

出にそ

女のとより女とては娘の形に

女のとより女とては娘の形に
全

出にそ

女のとより女とては娘の形に
全

出にそ

女のとより女とては娘の形に
全

春の夜に女とては娘の形に
全

出にそ

女のとより女とては娘の形に
全

出にそ

女のとより女とては娘の形に
全

出にそ

女のとより女とては娘の形に
全

出にそ

女のとより女とては娘の形に
全

出にそ

女のとより女とては娘の形に
全

出にそ

女のとより女とては娘の形に
全

出にそ

〇三十五

○戀夏之部

揚州やみかく等の片々〜
 生原の袖誰より引と離しの尋
 昔原一籠の石乃可竹笛
 家指差す猫巾着屋も意の寄
 出代や片寄の和出乃鏡支
 琳林や梅観さ〜と竹をいし
 象より意ハ担ふ度りそまゆ水
 か四杖の相傳し〜と猫の妻
 里通ふか山より寄也籠 舟
 歩かぬ娘紫也まゝ古 雛
 男ひ何〜を廊ふ落せ 舟
 房〜さふ梅を寄あゆの妻元外
 山女 植女 文質 篇軒 牛家 尼可 護物 知足 香山 我思 若翁

眉まけを傳ふ〜と 紅の 雲 翁
 形末ハ誰れか其ん 紅乃を 翁
 泣伏しぬぬい 赤あゝ 汗拭ひ 翁
 井小壺院ふ女ハ思ひも
 か亭ぬ法中ありたり
 顔何亭よ清水せ縁長髪のみ 其角

後叙

ちや然〜吉原ゆて妻 物 空
 夢〜と一室 離空合や后 きき 翁
 夕顔小足と〜とや 牙もろろ 翁
 西家

子乙女ふ是洗〜と 嬉〜と きよ 其角
 河 原河〜と

奇家層小唄者やらん

西施

是あう極うらう極母うを 撰人

袁左家

眉揮の寄らり芥子の白う水 巴風

後叙

きぬしや解ゆりよりも杜宇 除局

待意

待意や法きあき程ハ故も念共 妻奥

後叙

待意出く森新み名る 介世小 長江

意死ふハ我う塚不帰ハ時多 挿 奥取

宵くの待分は清き水精外 為系

黒いぬ弱形何あり市々き江 舌尾

五管や数ふ令のも恥くくと 深補

袖うしや音森の待屋小月のき江 多代女

里無き森覚ハこわき 故結小 巻嘆

出干や区あり其の筆乃 珠 必苦妻

翠芦原しあう妻あう深 和 秋色

純花の小風と見ゆる紫りり奇 首写

竹巻古中 揚く 燃て 忍り 顔 杉候

我意や只ハ吸きぬ妻 息打 嵐雪

郭公曉命と買せ事 一 全

虫干の扉小立枕ニうら 形 久澄

経秋と系ハ恋〜〜愛ハ幸〜
名子形見小知〜〜恋ハ
情子也櫻の障子となく
寄子嘆や思ひ男の四り
岸小秋の舟を渡〜〜
人の恋此情し〜〜
早乙女や恋も〜〜

○戀 秋之部
今の久屋田の原よ片仮生 菊

然望維

飛城の小想〜〜九月
大和路の女子物以〜〜 其角

伝瀬女小材のあまきと君ひ免 全
青山道〜〜

誦子と多や心づく〜〜ハき〜 全
二挺立の御棹

髪とやく梳つ〜〜星乃 全
女未あゆま〜〜舞ひ子
あき〜〜

思ふ〜〜秋葉 全
采唐塔 全

秋と〜〜秋外 菊号
新恋
とぬ殿と唐恋〜〜君おろ〜 全

歌言出意

兼出子我思心八思り色 以 誇水

寄楓娘拙女

逢ぬ日ハ禿 子思心 紅 髪 亦 法 足

陸石然難別

洗濯の中ハ別 子 亦 新 石 之 道

六宮粉黛無類

音響の福妻 吹也 月 の 聲 長 虹

おのれ 程 法 下 月 局 難 亦 嵐 亭

深か 後 知 子 ね と 材 の 初 終 亦 代 女

秋 持 下 亮 竹 子 葉 の 亦 言 水

別 甚 下 も 秋 の 有 文 の 石 亦 形 言 墨 女

誰 子 方 と 思 不 下 居 子 控 筆 の 月 思 聖

美 女 美 男 竹 籠 不 稀 子 迷 以 外 其 角

更 子 月 送 下 度 才 の 女 亦 亦 且 葉

東 ぬ 人 と 所 不 煙 下 せ の 推 の 亦 言 水

憂 人 と 又 口 祝 見 九 終 の 善 去 束

福 妻 亦 子 の 形 持 下 候 亦 枕 全 氷 花

思 心 於 下 亦 何 不 女 水 の 月 亦 全

星 宮 中 殿 の 御 入 の 終 の 音 亦 全

只 下 樹 焦 甚 下 存 の 紅 葉 亦 亦 子

鈴 籠 亦 亦 亦 亦 亦 下 恒 百 亦 亦 室 墨

才 の 鷹 子 程 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

色 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

物おのり小才もあつてそ程の風 蝶 碎
 終末の啼きおれ物も思ひ小 世 固
 係孫等思ひを業の多せ 女 菜
 油さし〜？ 藤 娘 枝 小 樹
 夫と知り 為 小 明 白 葉 小 女
 長き杖や 来ぬ人よ 心 鐘 の 音 和 反
 さ〜是も月小 曜 あり 心 一 小 川
 毛の川あり 昔ぬ思ひ 誰 一 夜 英
 大啼いり 生 方 也 望 乃 月 樓 川
 秋葉や 美し 走 ぎ 程 一 女 玉 榮
 松上や 苔 湿 不 啼 積 乃 小 菘 菘 菘 菘
 鬼灯や 哀 せ 青 ぎ 先 遠 米 女

○戀冬之部

舟のき伏そ 蒲 末 也 室 ぎ 杖 也 湯 ぎ 箱
 舟 ぎ 入 子 乃 踏 乃 水 全
 出 口 乃 全
 後 船 小 犬 と 拂 乃 袖 の 重 其 角
 疎 心
 雪 打 也 若 子 乃 返 乃 小 忘 衣 全
 湯 屋 の 卯 酉 小 舟 の 毛 む 乃 乃 全
 菘 菘 の 通 心 道 途 乃 乃 菘 菘 菘 菘
 鴨 の 毛 也 菘 菘 の 家 の 道 乃 乃 乃 全
 人の 妻 也 乃 乃 乃 乃 全
 菘 菘 の 空 と 乃 乃 乃 乃 全

得る病も未だ全癒も秋の夜
 思ふ秋の才小とそをのき本の糸分
 我々急も老りみのみ及古袋
 妹々手ハ嵐の足も小秋分
 小僧珠形てあおらんの香
 羨と糸せと花つと何の秋の袖
 炭をわてと結したる根と分
 思ひ羽ハ振ても未と物の中
 衣くせと歳尾よと何の衣り
 小若花ふ余志と衣分の煙分
 物おもひの煙と明けくはあらん
 此と花子本分引と衣分の煙分

秋色
 干那
 護物
 甘南
 全
 小叢
 花邊
 曉星
 冬松
 香白
 船散
 啼費

終末も活も思ひよと袋乃雪 一隣
 岩葉らふ秋分と衣もの衣分 衣分
 衣々急ハ敷も衣分の衣分 衣分
 好の衣分の衣分の衣分の衣分 衣分
 衣分の衣分の衣分の衣分の衣分 衣分
 衣分の衣分の衣分の衣分の衣分 衣分
 衣分の衣分の衣分の衣分の衣分 衣分
 衣分の衣分の衣分の衣分の衣分 衣分

賀春之部

羨の衣分の衣分の衣分の衣分の衣分
 衣分の衣分の衣分の衣分の衣分
 衣分の衣分の衣分の衣分の衣分
 衣分の衣分の衣分の衣分の衣分

祝

有付ハ以く甚る形有ぬ世果あり 冬文
為号の四十の妻

榮基と叶生僅ふ見ゆる 外 壺五

家内業と建及人つ

米り梅や接穂の末も芳くき 万子

可由る業あくらふあしと嘆て

練ふ控く離も待ア一 枕の宿 涼傘

六十契

明六ツと子代の初の妻々 外 蓑衣

初産せん梅子且母の影侍ん 曉臺

七十契

子代侍ふ程ハ程あり 年 既 全

八十契

梅栞ハ十のうもくと 妻 一 一 全

可也く六をちせやく

笑うア耳取へ 飲む酒と 涼傘

七十の初あふとわく

八^{ヤフケ}焼^ケ頂も足へたり 軍の曉 橋 全

名と取く〜んふ

香の業も花と表ゆ山道 外 蓑衣

航之の祝六十契

ありみゆる相より見れハ壺 外 全

四十契

妻の初志ゆほゆらとあり せ 全

不才を以て穉くも仰せし是も杖 全

何人乃安ん

行末や松木對馬眉 全

澄波の赤林堂教原は妻

幼老もあれたと祝へ

老の名とけり松芽の林 全

おあ〜

月香も程よき人也 袖も髪 全

曰

未も若も枝も花の中ぬ 齋のあ 有月

林のまゝぬわるとは船の初務り 蓮臺

一粒を子代わたりよりの豆 若比

老を八旬の契

香ふ白ふ十島か市を 梅は春 全

今宵もそ程は赤の喜也

かくて後程は重梅乃 壽子も 全

深名氏藤雲も津百と契へ

老て程も深中松の徳か 津ら 全

魯公の羅髮也祝へ

老近の老も初りて 湯のあ 為山

近縁翁古穉祝

さゝ信も盡ひ雪子と 松離子 全

○賀夏之部

子孫りたる人へ

屋敷も種あひしりかき 許六

初て一年おつた者中うけなす

生の二人雛かゝ強へく機 迄通

病後せやく

五州の海も癒たり五月白 雙花

指のり病よりたてるせやく

是まぬあふくそおろし燗 凍城

七十の老猫せ習書も又

六十の翁あり

不才や君と齡せたりらん 暮方

里の祖母九十せ壽

生類せわさき下凍し九折 壽公

○賀秋之部

石の駒降りたる人へ

時もきし紀たる言ふ秋さき 酒堂

家の河らける人をかく

かき於牡丹あり秋の宿 陳李

祝

子代の粒白ひふあかき 亀洞

○賀冬之部

祝

先いそ松せあるの冬 翁

何れもふ吸家尾のあきさふ

喜めあい花弾の道や 入藝

遠空の初孫の如き

笑をせし見をわが喜乃 留山 以月
如葉といふるあふ對しを喜光と祝す
是かゝハ芽らむをわが喜乃 留山

○ 祝詞附唱句法樂春之部

伴幣

何の本に花ともあはぬ白ひ 小 翁

全

春の海もや和光の空のむら 小 翁
雪さや雨ふたなる 梅 小 翁
春の海もや和光の空のむら 小 翁

春の海もや和光の空のむら 小 翁

何の本に花ともあはぬ白ひ 小 翁

梅

常よりと流せなかり 後小 翁

熱田詣り

梅の香もよる夢定し 留山 小 翁

聖廟参詣

春の梅の一重も花のむら 小 翁

春の梅

江のあはれ梅の香の誓ひ 小 翁

初年参詣

梅の香もよる夢定し 留山 小 翁

唱句文殊

梅の香もよる夢定し 留山 小 翁

左下

祝詞附唱句法樂の春

〇四十五

全 河州

今もその程や庭に生く 朝露 未了

全 池之

八景の道志も出たり 萱州 未了

香取社殿

踏の香取言一 梅葉 了 旭舟

麻島社殿

松栢も若葉もあはれ 中法うき山 了

法手洗

寺や陽よりあつたよ 龍の 音 雲原

法手洗

清き井も雪も新せらる 竜 二橋

○ 全 夏之部

時 鳥 林 山 の 中 を 通 り 翠 里 玄 雲

空 寺 の 灯 を 法 之 家 の 火 津 外 龍 洞

破 扇 一 度 は 涙 中 津 外 菫 葉

河 原 上 庭 中 生 き 草 不 成 根 外 菊 雪

夕 空 也 雲 も 霞 一 夕 林 之 路 麦 林

不 二 橋

涼 し も 和 風 の 流 き も 壺 の 下 菫 葉

不 二 橋

あ り け り 安 し け 後 の 不 二 橋 菫 葉

江 の 崎

橋 涼 し 波 引 舟 々 歩 浪 り 吐 息

○今秋之部

玉津島

霧の白く衣通服う素肌見せ 素重

如茂小諸

月かけ梅子も多様あり 上 史部

秋田繁

花はさき大名花せまのりり 那 虎堂

菅 祿

一面や月も花はつた 秋 和景 幸因

松も阿の秋も南枝の梅 操 梅法

吉 寧 府

流石洗ふまき砂書や滴り多 涼 柳

秋立男山王を

秋の手に秋阿の秋も涼く不凍水 吐 月

○全冬之部

熱田の流廷宮阿のりて

魔虫は鏡も清く雪の玉 那 翁

の五家 斎 御

雪知ぬ斎も妙あり 神 祐生 利重

美 祿

袖の皆 渡 野の歌や冬の梅 幸 梅

卒もとくむる 流 雪 以 之 降

たふふは流神もまうた

白髪の銀も木も雪も年の芳 涼 柳

實神

松子不思羨の跡了 麓 爲 引 秀 搦

麻 崎 小 七

ぬ 不 法 等 八 清 彦 也 志 三 敷 引 登 古

○ 雜 部

近 藤 子 雜 産 引 寄 三 三 三

つ 子 小 屋 小 の 名 ん 七

摩 河 後 若 志 三 美 女 内 寄 特 引 宗 祿

深 川 若 妻 志 小 塚 也 三 引 地

麓 引 と つ 三 事 八

在 乃 中 八 引 三 宗 祿 の 寄 引 引 翁

秀 吉 畧

外 ち 志 八 杖 突 坂 也 三 引 翁 引 全

岩 崎 小 七

於 志 三 神 八 錦 森 の 引 引 翁 引 全

松 尾 也 志 三 引 翁 引 全

芳 雅 志 三 引 翁 引 全 望 引 万 事 九

三 引 翁 引 全 望 引 万 事 九

松 尾 也 志 三 引 翁 引 全

新 の 梅 子 志 三 引 翁 引 全 其 翁

同 志 の 翁

檀 松 子 志 三 引 翁 引 全 班 森

同

友 候 三 翁 也 松 尾 志 三 引 翁 引 全 牛 心

同

飛の甲意らるる時不啼もせは 乙州

四十二契

二程とすむ心の自終 二のち 斜露

元禄七年の夜

古せ哉翁のあまきとん送るを

妻奴る小解屋の店にありあ 為号

武蔵法師とてあらうか

寺があやしくやうやく雲の衣川 高雲

俱利伽羅峠の翁塚

をねしとて

ふまをり也 藤がかりしよむ塚のふま 素子

以上

○ 数句案方之事

祇前田句い無念相のうあふ一念と新古是と
起下ふ無念相ハ物中ふ一物あふまむふ時
都公月雲と流向起る先正自由の句作とそ
え々手系意と定め句とあるあり

○ 序歌曲の事

えのふ 田 毎のりこ特 意 一 序

秋の秋と打 意 一 序

借小田序ハものまゝ一あやしく元日の月の田
毎と思ひあふ後ふりこ特意一以事を曲と

求めはつらの境ふ久たるものハ甚句といふ
かろび

○連聲音通の事

アイウエヲ	ハヒフヘホ
カキリケコ	マミムメモ
サシスセソ	ヤイユエヨ
タチツテト	ラリルレロ
ナニヌ子ノ	ワ井ウエオ

○連聲の親句

えりや^ヤびき^キく^ク雀^ノの^ノ物^トかたり

○音通の親句

何^{ナニ}も^モ涼^{スズク}し^シ麻^マ島^ノの^ノ海^ノの^ノ筈^ト小^コ松^ノ

○正親句

初^{ハツ}年^{トシ}や^ヤ田^ノあ^リる^ル畑^ノあ^リる^ル棚^ノ信^トや^ヤあ^リる^ル
方^{カタ}を^ヲ存^{ゾク}純^{ジュン}新^{シン}室^{シツ}の^ノ契^ケ常^{ジョウ}小^コ結^{ケツ}小^コ若^{ニョ}より^{ヨリ}
句^ク抄^{セウ}多^タく^ク於^オ疎^ソ句^クハ^ハ親^{シン}句^クふ^フき^キは^ハま^マり^リと^トい^イふ^フ
事^{コト}終^{ハシ}る^ル知^チる^ルべ^ベし^シ連^{レン}聲^{セイ}音^{オン}通^{トウ}ハ^ハ作^{サク}者^{モノ}の^ノ分^{ブン}
小^コ有^ユる^ル

○虚実正の借

虚	系	切	き	を	書	く	も	あ	る	風
正	系	切	き	を	書	く	も	あ	る	風
右	俳	詞	の	甚	句	其	小	虚	実	の
風	俳	詞	と	い	ふ	あり				

○俳諧

今ハトテ完明留道き月のかき

○姿の情

沙路使統とも不
安なきとさくらか

姿 無 無 姿
年の庵や 鮎の 既ハ 喰ハ 仕舞
年の 庵や 既の 方ハ 喰ハ 仕舞
沙とすく のを 神も 喰き 暮らん
沙をゆく 身を 神も 喰き 暮らん

一篇 序 年月 暮る 梅山の 花を 喰き 暮らん

一曲 一篇 お作法の ありとも 喰り 喰り 喰り 喰り

○五品の俳五体共云

香

舟の 香や 箸き 脚の 及ぶ あり

箸き

道草 不覚 とも 休路の 始末 あり

あり

塩鯛の 薫る 香も 一葉 桑の 花

鯛

木々 香を 茶摘も 吟や 香魂

志

埋ま 香も 消る 泪の 香も あり

○八體函玄

古知や 蛙 飛 込む 三川の 香

人も見るぬ妻也 遠くららぬ山
影と死ぬ気色をいへば 涙の影

○有心

空原のたけ古きよ 冬末幾里
梅の末に 程屋や 木や梅の影
猿引の猿は小袖をきぬく 引

○無心

赤くともいはず 遠くも秋の風
雪野く霜かき 泣や 夜よ 空
其原や 兵もり 爰 乃 終

○悠遠

百魂きへ 羽方や 念 却や川

六月や 翠も 雲も 嵐も 山
梅も 香も のりとも 紅も 山 梅も

○風艶

象 沼の 雨や 西 橋の 木子 小 春
猿 橋の 片も 小 春 花 花 影 髪
却 橋の 雨と 程 象も 山 如 命 命

○寓言

道 端の 木 権の 写り 映 生 けり
きの ぬきも 帰ると 思ふ 思ふ 思ふ
雲 折る 人を 休む 月 影 外

○風情

い 何 せうと 一 雪 見よ 終る 雲 中 冬

五月月面を集めくろく家上川
株細ふ人を反燈の枝おろり

○風曲

婦り夢の居家之東は素纏
書くともさしきりのせ屋よりし

京清もつか兄の座あり七兵衛

右十体三十体ありてあり古東作書子有古和是
をもつゆと五体八体と法四と出た右の列白之

夫宛細の縁句のよ基と云ひは小用中りおの切字の河清
ふも何う走只一もの四言巻の望模果是し今若句誌あ
て模の入らぬの達の之望模果是し今若句誌あ
り其上歌の京物迹き株不仕立る句詳たたるを

「大木も動くやあり 蝉の聲」
一序 一意

注動の中ありと入たるあまて震白おろりあり

「大木ふとありて鳴や 蝉北聲」

と此書六模あきぬ平句あり

「松島やとく来も不やく雪よりそ」

と一其何事の名所を盡ても同一とすあ書六松島
の書ら定かてて也と此定昔昔の集りに此あら

「松島やとく来も不やく雪よりそ」

と此書六八百八島の不平おろりふしと 性書書
白おろりて此おさめく様之破之曲之留巻の中
換抄とある之此外お慶万化の書白も此む抄ふ

よき思ふあり

着想の會ふは後といふ字せきうかよの句名時
表八句あり中の句名時表七句あり百類の時
九句あり想しを甚句いふか不録持あるや否と
いふけししを殊共べし勿論句不死活といふ
とあり

○其角が中三下

山つららと表ふ名めありと
山つららと表ふ名め附と活

○千代の句不

於魚や何そはくさの祐ありやう死
於魚や何そはくさの祐ありと無活

○五服之事

空豆外 花咲かぬありまは縁り 赤添

空の 水鶏 乃 毛子 深川

去るよ 虹の 輝 啼 空乃 空 相對

松乃 茂みを かくる 三月月

換抄本の眼あり

法き 獲も 持て ぬり 新に 養子

悔乃 古 葉 不き 空 一 啼

昔や 一 聲 啼て あり 向む

以 垣 柱 不 梅 山 空 一 啼

曾 月 中 鴻 の 法 一 並 び 居 候

冬 の 朝 乃 暮 生 け 里 中 一

右方の旭の表と以て一以思之と云ふは、右の字相を
思ふ一以思之と云ふは、右の字相を

○又顔礎の脈と以て

空の 阿の山状、その一以思之

江の 阿の山状、その一以思之

○一以貫之

若くは天の照ハ地あり才三人道之元来天竺人の三
才をて達立したる事之は、右の表向ハ阿の山の出
るも、阿の山状、その一以思之と云ふは、右の字相を
照ハ若くは天の照ハ地あり才三人道之元来天竺人の三
才をて達立したる事之は、右の表向ハ阿の山の出
るも、阿の山状、その一以思之と云ふは、右の字相を

五の 阿の山状、その一以思之と云ふは、右の字相を
地と云ふは、右の表向ハ阿の山の出るも、阿の山状、
その一以思之と云ふは、右の字相を

若くは天の照ハ地あり才三人道之元来天竺人の三

才をて達立したる事之は、右の表向ハ阿の山の出

阿の山状、その一以思之と云ふは、右の字相を

○第三の事

才三人道之元来天竺人の三才をて達立したる事之は、
右の表向ハ阿の山の出るも、阿の山状、その一以思之
と云ふは、右の字相を

右の字相を

出示於葉 ナンジニハコイクサ、
シムノコ、ロナリ

文字考三

○文字考三の序

和とめく陸の花車

雑談
二百篇
西野

今之世に祖翁深密の因と法蓮華
志し得る者の著ふあり事と也と
評し記しをまぬ

以迄
新撰
俳句
七百題
の巻尾

明治廿年十月廿八日出版御届
全 年十二月刺成

編輯人

東京府平民

伊藤新三郎

日本橋区新右門町
十二番地

出版人

同府平民

高木和助

全區鉄炮町廿五番地

